



ミュージアムコラム

武庫川女子大学附属総合ミュージアムでは、所蔵する国の登録有形民俗文化財「武庫川女子大学近代衣生活資料」全 9,092 点から季節の主題に沿う資料を選び、一年を通じて学術研究交流館（IR 館）1階ロビーにて展示をおこなっています。

2026 年度春季企画

水のデザイン

2026 年 4 月 3 日（金）～ 6 月 12 日（金）

絶え間なく流れる水は、けがれを流す吉祥的な意味を有しており、洋の東西を問わず各地で神聖視されてきました。また日本では古来より、水や雲といった身近な自然を文様として取り入れてきました。時代をこえて、様々な美術工芸品や衣装のなかに、時に雄大な表現で、時に優美な背景として、水のデザインを見出すことができます。

書家でもあった武庫川女子大学の校租・公江喜市郎先生は、「風濤偕和」という言葉を愛し、扁額や扇面などに数多くその言葉を書かれました。先生が昭和 42 年、勲二等瑞宝章を受賞された記念に刊行された『風濤偕に和して』のなかに、この言葉について語る公江先生の次のような文章が記されています。

「水澄み、山静かにして、風濤偕に和す。」という私の書が、第一学舎の学院本部正面に掲げられている。私はこの書の通り、水澄み、山静かにして、風濤ともに和するところこそ、わが武庫川学院であり、武庫川学院の精神であり、学風の根基をなすものであるとかたく信じて疑わない。（『風濤偕に和して』 p.582 公江喜市郎先生の教育理想 より）

このたびの展示では、水のデザインについて取り上げます。本学にとっても重要な意味をなす「水」の様々な表現について、お楽しみいただけましたら幸いです。



1. 長襦袢（昭和期）



巻物を開いたデザインで、歌川広重「東海道五十三次」のうち「箱根 湖水図」と「見附 天竜川」の場面が染めで表現されている。実際の浮世絵と見比べると、モチーフが部分的に省かれていたり、題名や印章などの表記が多少異なるものの、全体の構図や表現は一致している。

「広重ブルー」と称された浮世絵の青の表現を活かすようにして、湖や川といった水辺の風景が、本資料でも特に目を引く鮮やかさとなっている。



2. 裂地（大正期）

観世水風の文様に源氏香が散らされている。観世水は、楕円状に波紋を描き、水が渦巻いている様子を表現したもので、能楽の観世流宗家が定紋として用いた格式高い文様。

また源氏香は、江戸時代に流行した組香の主題のひとつ。5種類の香を聞き、同じ香りのものをつないだ組み合わせを示したもので、52通りあることから、源氏物語 54帖のうち桐壺と夢浮橋を除いた52帖の名前が、それぞれの形に付けられている。



- 3. 名古屋帯（大正～昭和期）
- 4. 徽章（明治期）
- 5. 徽章（不明）

【3】船の上から水面に棒を伸ばして作業をする人物と、水車、土手の柳、そして水辺の草花が染めて表現され、部分的に刺繍が用いられる。

大きな山水画の添景を部分拡大したような図様で、本資料に見られるような水の表現は、風俗画などで場面転換のツールとして使用されることもある。優美な水の流れと水辺の景色を表現しながら、構図の切り替えにも大きな役割を果たしている。



【4】円形のなかに桜・菊・流水を組み合わせた徽章。箱には「普通会員章」と記載があるものの、具体的な内容は不明である。

本資料を含むコレクションには、明治期に授与された徽章が数多く含まれる。それらの資料からは、当時の社会的なイベントへの参加や社会的要請への対応、地域に根ざした信仰との関係性を見出すことができる。いかにも日本的なモチーフを組み合わせた本資料も、当時の社会的参加の様相を示唆するものである。

【5】菊花と観世水を組み合わせた徽章。時代や内容は不明であるものの、旧制神戸高等商業学校の校章と酷似している点が指摘できる。旧制神戸高等商業学校の校章は、本徽章に「CHS」の文字が配置されているもので、同高校の初代校長が湊川神社ゆかりの菊水文を起用したことが知られることから、本徽章も、地域との関係性が想起される。

菊水文は楠木正成が用いた紋として知られる。

次回の展示は2026年6月を予定しています。